

北インド・クニンダの二言語併用貨幣

吉池孝一

紀元前2世紀前半にインド西北の地においてギリシア系のバクトリア王国より二言語併用貨幣が発行され¹、その後もこの地において同様の貨幣は発行され続けた²。

この二言語併用という新たな貨幣様式はインド西北の地だけでなくその周辺の地にも伝播したわけであるが、ここでは古代文字資料館が所蔵する北インドのクニンダの貨幣(カローシュティー文字とブラーフミー文字による)を紹介する。これは紀元前1世紀、インド北方(現在のデリーの北方)のクニンダ族発行の銀貨とされているものである³。



左

右

表裏両面に異なる文字と言語による銘文がある二言語併用貨幣。先ず写真左をご覧ください。インドの伝統的なシンボルマークの周囲にカローシュティー文字で書かれたインド俗語(ガンダーラ語)がある。右から左に読む二行の銘文が貨幣の周辺に沿って配されている。一行は、4時の位置より反時計回りに貨幣の内側より見て ra[ña](王か?)、

¹ ヒンドゥークシュ山脈を越えてインドの西北に進出したデメトリオス1世の息子には、デメトリオス2世(前180-前165)、アガトクレス(前180-前165)、パンタレオン(前185-前175)の三人がおり、それぞれの王名の二言語併用貨幣が発行された。デメトリオスとするものはギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり前田1992(161)によるとこれは2世の発行に係るといふ。アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある。

² イラン系の所謂インド・スキタイ朝、クシヤン族のクシヤン朝においてギリシア文字とカローシュティー文字銘文をもつ二言語併用貨幣が発行されたが、紀元後2世紀中ごろクシヤンのカニシカ王に到ってカローシュティー文字によるインド俗語(ガンダーラ語)の銘文は用いられなくなった。

³ Allan1936の159頁参照。

[ku]ṅidasa(クニンダの)、amogha[bhu]tisa(アモガブティの)とある。[]はAllan1936(159)で補った部分。他の一行は、4時半の位置より時計回りに貨幣の外側より見てmaharajasa(大王の)とある。なお、maharajasaのjaの字形であるが、規範的なものにはラテン文字のyのように下に突き出る部分がある。しかしながらこの貨幣ではそれが見られない。

次に、写真右をご覧ください。女神とみられる立像と鹿の周囲にブラーフミー文字でかかれたインド語(サンスクリット語か?)が一行ある。9時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみてrājñah(王の)、kuṅ[im]dasa(mの上)に点。クニンダの)、[amogkabhuti]sa(アモガブティの)、mahā[rāja]sa(大王の)とある。[]はAllan1936(159)で補った部分。なお、Allan1936(159)は三箇所の属格語尾をsya(or sa)とするが、この貨幣ではsaとなっている。表裏の銘文はともに“クニンダの王、大王アモガブティの”と読める。

この貨幣は、円形で両面金型打刻であり、銘文は二言語併用で王名の属格を含む。これらの点よりみて、ギリシア系バクトリア王国で発行された二言語併用貨幣をまねたものとみて大過ない。もっとも、山崎1997(197-198)によれば、王の像がみられない点、ギリシア文字を使わずインド文字のみを使用する点、図像にインド土着の神々やインドの伝統的なシンボルマークを用いる点が外来民族(バクトリア、インド・スキタイ、クシャンなど)と異なっており、部族貨幣には隣接する外来勢力に対する土着勢力の抵抗の意思が示されているという。

【参考文献 (発行年順)】

John Allan1936. *Catalogue of the Coins of Ancient India*. London: The British Museum. First Indian Edition 1975. By Oriental Books Reprint Corporation.

前田耕作1992. 『バクトリア王国の興亡』(レグルス文庫), 第三文明社。

山崎元一1997. 『世界の歴史3 古代インドの文明と社会』中央公論社。

P. L. グプタ著/山崎元一他訳2001. 『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。